

始



03  
1 2 3 4 5 6 7 8 9  
10 11 12 13 14

特243

714

文書第八輯

弘法大師の護國精神と教化

古義眞言宗學務部

幼年

目 次

一、序 言	一
二、天師の御家系と平安遷都	三
三、奈良佛教と聖武天皇	五
四、無批判の外來思想と弓削道鏡	七
五、時代思想と大師報國の赤誠	九
六、密教と日本精神	十六
七、神道、並に御皇室と真言宗	二三
八、大師中心の布教と教義	二七



特243  
714



九、大師本尊觀と日本佛教 ..... 二二

十、三國思想の相違と大師觀 ..... 二三

十一、大師の芳躅は果上の靈用 ..... 二四

十二、布教家の修養法 ..... 二五

十三、普門の布教一門の布教 ..... 二六

四七

# 弘法 大師の 護國精神と教化

古義眞言宗學務部編

## 一、序 言

私はこの度特に出てお話せねばならぬ程珍らしいものではありますので、最初本部長殿から承りました折には、辭退しやうと思つて居つたのであります。その後種々考へまして、多年御無沙汰を致して居ります同僚や、知己の方々に出会へるといふことが、私情に於て非常に嬉しく感ぜられるのと、それから本宗の布教方針に就て、此際私の信念から特に申上げたいことがありますので、思ひ返しまして出席することに決めたのであります。従つて私の考へる布教方針の上から大師に關するお話を申上げるので、「弘法 大師の 護國精神と教化」といふ題を提出したのでありますが、時局講習會の意味から、何か時局に關する意義を加へた特殊な題にして貰へぬかと、電話を學務部からも承つたのであります。私が大師に就て申上げる事柄が相當複雑

でありまするので、急に時局的な講題に致しかねたのであります。さらばどういふ事を申し上げるか、まあ話を聽いて戯いて、尤もでありますか、不尤もと思へますか御判断を願ふより仕方がないのであります。

私は已前から大師の御傳記が六百部もあるといふ事を承つて居りますが、勿論その御傳を皆私が讀んだこともなく、ほんの一部だけ拜見したのであります。私の読みました範囲では、どの大師傳にも當時の文化、政治、經濟などの、大師の背景になつて居る時代といふものを記載したものがないのであります。これは大師の全體を理解する上に甚だ不行届なことで。たとへば寫眞で大師を拜むといふ程度で、生き／＼とした全體としての大師を見るといふことは出来ない、私は大師傳に就てかねてさういふ疑問を持つて居るのであります。それから大師の御傳記を読みつゝその御家系を拜しまして、自ら合點の行く感じを得たのであります。近來國體明徴の論が盛んになるのに連れて、國體の尊嚴に對して血が湧き肉が踊る感じがすると共に、大師が日本の獨創的な密教を開創せられた所以と、鎮護國家をモットーとして眞言宗を打立て

られた意義とを、痛感することが出来るのであります。就ては私はこゝに大師御出世の時代に關して、談りますと共に、御家系のことを一應申上げておきたいのであります。

### 一、大師の御家系と平安遷都

大師の御家系に就ては二説ありますが、今日確定して居る説は神系から出られたといふことであります。即ち最初は高御產巢日神から出られまして天忍日命、それから續いて佐伯家迄参つた、その途中で神武天皇の東征、肇國の際に大功を立てさせられた道臣命が御祖先の最も優れた御方であります。降つて大伴武日命は、日本武尊の御東征に従うて偉勳を立てられました。大伴家は建國以來武臣として朝廷に仕へた御家柄であります、その大伴家が後に佐伯家に分れ、佐伯倭故連といふ方の時に讃岐の國司に御成りなされた。その八代目が大師の父君佐伯田公公となり大師はその二男と云はれて居ります。

大伴家は御承知の通り「山行かば草むすかばね、海行かば水漬くかばぬ、大君のへにこそ死

なめ」と詠はれた、即ち武將として我歴史上赫々たる武勳のある、日本精神に富んだ御家系であります。その御家系に生れた大師が、鎮護國家の眞言密教を御開きなされたといふことは、實に當然な事であります。特に宗教家になつて此の國家を救はうといふ發願をせられた因縁、それは三教指掃を讀まれてゐる方は私が申上げる迄もなく御承知であります。小忠小孝を捨て、佛教の大忠大孝を行ふ、そういう御趣意で出家遊ばされた御精神は、三教指掃で詳しく拜察することが出来ます。しかしそれに付て、從來の研究の上では、唯大師が人生の儻いことを感傷せられ、又儒教、道教の淺はかなことを知られて、永生に生きる佛教に入られたのみ觀察されて居るのであります。

所が大師御一代の事業を觀察致しますと大師はそんな弱い方では無い。大師の報國盡忠の御精神は、單なる人生觀の上からのみ來たものではない。當時の國家の状勢が、小忠小孝を捨て、大忠大孝を果す大乘的思想に依らなければ、當面の日本を救ふことが出來ぬといふ、國家的觀察から出發して居られるので、私はこの點を諸君に再認識して戴き度いと思ふのであります。

何故私がかく申すかと云ひますと、大師が御出世なされた當時は、桓武天皇が奈良朝に於ける佛教の弊害を觀破せられて遷都の御決意をなされ、初め都を長岡に遷されることに決した。その長岡に都を遷される時の造宮使が、大師の大伯父に當ります佐伯家の元老である、今蝦夷といふ方であります。この今蝦夷といふは、他の罪に連坐して、一時太宰府の帥に貶せられたが、大師が大學に入らせられた當時、今蝦夷も職を辭して筑紫から都に歸つて居られたので、遷都の意義や、時勢の動向などに就て、今蝦夷公からも阿刀大足公からも聽かれたこと、思ひます。

その後長岡が都として不適當であるといふ所から、今の平安京に再遷せられた。かくの如く多大の費用を要れて長岡や平安京に遷られたといふ御遷都の裏には、どういふ重大問題が潜んで居つたかといふことを、我々は研究する必要があるのであります。そして御歴代詔勅集に依つて見ますと、桓武天皇の御宇に佛教に關する詔勅が十餘度出てゐるうちに、僧尼の浮濫を責むるものが、九度の多きに及んで居るのを見ても如何に當時の佛教界が紊亂して居たかを知る

ことが出来るのであります。

六

### 三、奈良佛教と聖武天皇

私は歴史家としては全く素人であります。従つて私の言ふことは信用願へませぬ、私の想像で申し上げることが多いので、更に御研究を願ひたいと存じますが、佛教が聖德太子の御力によつて日本で發達しかけてから、日に進歩を致しましたが、最も盛んになつたのは、奈良朝であります。奈良の都と申せば今日参つて見ても、佛教より外になにもないことがはつきりと反映します。東大寺をはじめ興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺の七大寺がその間に建てられ、尙東大寺の分家と云ひますか、國分寺が全日本毎に建ち、又藥師寺が建ち、法華寺が建ち、全國的に佛堂伽藍の網を布かれたといふ程、盛に佛教が興つたのであります。

その奈良朝佛教を興隆させられた中心の御方は聖武天皇で御座ります。天皇は佛教に取りて

は實にこの上もない功績のある御方であります。所が神道、國學者、儒教の人達などからは、天皇は佛教に淫したと言はれて居られるのであります。私共が、古の御方と雖も兎角申上げるといふことは誠に相濟まぬことではありますが、併し事實を一應申上げて、時代を觀察する参考に資したいと考へます。

聖武天皇の時代には行基菩薩、道慈玄昉等の傑僧が國內でも出た時であり、印度からは菩提僧行基、唐からは道慈、佛徹などの大德が渡來した時であります。奈良朝時代は唐の全盛期であり、大唐は支那歴史中最も發達した時であり、その唐の文化の粹を蒐めて日本へ移植したのであります。何を申しても思想文化の上では當時の日本は、支那及び印度の大陸文化には大いに劣つて居つたので、丁度明治の初年に於ける、歐米に對する我國と對であつたのであります。奈良朝の我文化は、餘程進んで居つたのではありますが、大陸文化の謳歌といふことであつただらうといふ推察が出来るのであります。

聖武天皇は佛教にどれ程御盡し遊ばされたかといふと、天皇が佛寺を建造し、僧侶を得度さ

七

せられた御事蹟は、天皇の二年に僧を六百人得度せられた。九年に奈良で四百人、諸國で五百七十八人、十二年に諸國國分寺に三千戸の人民を封じ、丈六の佛像を造らせられた。十三年には國別に金光明寺を造り民五十戸を封じ、水田十町、僧二十口を置かせられ、又同じく法華寺を造り、水田十町、尼二十口を置かれた。十九年に諸國國分寺に田九十町、同尼寺に田四十町を加へられた。十七年に行基を大僧正に任じ、僧四百人を賜はり、又同年に僧三千八百人を度し、二十年には僧尼各々一千人を度せられた。又洵に畏れ多いことではありますが、天平感寶元年四月東大寺に御幸せられて自ら「三寶奴」と仰せられ五月、東大寺に五千戸を封じ、水田一萬町を施された。斯の如き御事歴を拜察しますと、明治以後全國に學校を造つて居ると、殆ど同じ様子で、否當時としてはそれ以上に國帑の全力を擧げて御盡し遊ばされ、陛下御自らその事に御携はり遊ばされた。又光明皇后も觀音の化身と御傳へする程の信仰家でいらせられたのであります。

#### 四、無批判の外來思想ミ弓削道鏡

これは明治天皇が歐米文化を探り寄せられたと同様で、非常に尊いことゝ存じますが、何時でも外來文化が渡來した折には、同時に思想問題が隨いて来る。天皇がそれ程佛教を尊崇遊ばされたら、その時代の日本人は朝野を擧げて佛教に醉ふたであります。僧侶を崇拜すること、寺を建てるに對して今日の支那事變に國民が一致して向うて居る如く、國民の精神を總動員して、佛教興隆に當つたものと考へられるのであります。その裏面にはどういふことが起るか。政黨政治盛んなる時には、政府の諸大官の間に、種々な腐敗問題が起りました。何時でも一方に偏つた權力が出來るとその裏に非常に危險な状態を包蔵して來るといふことが、人間世界の常態であります。

日本六十餘州の六十餘の法華寺、國分寺、國分尼寺、金光明寺さういふやうな大寺院が到る所に出來て、幾十百といふ僧侶が居住し、何千といふ領民が出來て中央に於ける七大寺には幾

千といふ僧侶が居り、朝夕國家の御爲めに御祈禱をなし、或は經論の講義をなし、又は上層階級に修養を教へる。而もその佛教は統一して居つて、今日の如く各宗派に分かれて居らぬ、理想的な佛教團であります。尤も内部では個人的な争ひや、僧綱などの取り合ひと云ふ様なことが、あつたであらうと想像せられますが、外部に對しては新來の佛教として、統一力があつたに違ひない。此の佛教徒の勢力、權力が果して如何になつたであらうか。事實はまことに最悪の説明を與へたのであります。

聖武天皇に次いで、孝謙天皇、淳仁天皇の十四年を経て、稱德天皇の登極せらるゝや、其の天平神護元年に、弓削道鏡が太政大臣に任せられたのであります。藤原家その他多年皇室の藩屏である周圍の門閥を壓して、一沙門の身を以つて太政大臣に上つた、弓削家はもとより相當の家柄ではあつたが、南都の戒壇を完成し唐代無比の戒律僧鑑真大和尚が、遙々迎へらるゝ程、佛教の戒律生活に信仰のあつた當時に於て矛盾も甚だしき一ヶの出家僧が、太政大臣に昇り得たと云ふことは、果して何を物語るものであるか。

弓削道鏡に如何に抜群の才があつたにしても、これには大なる背景がなければならぬ。武力的背景といふか、政治的背景といふか、俗界に於ける總ての名聲と權力とが揃はずして一躍して太政大臣になるといふことは、既に政治的體制の整つて居る奈良朝時代に、あり得る筈はないのであります。従つて道鏡の弟が筑紫の太宰府の帥になつて居つたとか、次に道鏡を帝位に就けられたいといふ上申をして來た宇佐の八幡の宮司は、又道鏡の子分になつて居つた程、道鏡の政治的背景が行き亘つて居つたと思はるゝであります。亦之れは平安朝に於ける、諸寺諸山の僧兵の、出來た原因を考察すれば、想ひ半ばに過ぐるのであります。

果して天皇の三年に宇佐の八幡宮から、道鏡を天位に就くべき御神託があつたと上奏して來たのであります。この天人共に容さざる大不臣事を、朝廷に於て表面から誰一人争ふ者がなかつたことは、太政大臣道鏡の權威が、どれ程強かつたかといふことを物語るもので、今日から想像しても戦慄させられるのであります。茲に僅に一人の和氣清麿公があつて、筑紫に使ひする時、道鏡から我が味方をなさぬ時は、命はないぞと云ひ附けられたにも拘らず、宇佐から歸

つて來て、神國の國體と、天位の神聖なることを斷言し、臣子にして天位を覗覦するが如きは、亂臣賊子萬死に値ひすると、上奏をしたのであります。この和氣清麿公一死の御奉公があつたために、畏れ多いことありますが、我日本の國體の尊嚴が千載の今日に保たれて居るのであります。

私共は佛教徒であると共に日本人であります、その佛教徒の中から道鏡の如き者を出したと云ふことは、實に百世に涉つて中譯のないことであります。併しながらかういふことが出来た思想が何處から起つたかといふと、上御皇室の恩寵に慣れて、佛教の勢力があまり強くなり過ぎたことが、一つの原因であると思ふ。今一つは支那、印度から輸入して來た國體觀念に添はない、印度の婆羅門種が刹帝利種の上に居るものだといふ思想、それが當時に傳へられて、僧侶は人間の最上に尊い者であるから、帝王にしてもよいとかういふ考へが出來たのではないかと思はれます。先刻思想問題に就て小川先生がお話なされたが、小川先生が今日取扱はれた以前に出た、明治時代の幸徳秋水等の大逆事件、さういふ思想が出來たことを考へて見ましても、

私はその最も遠き殷鑑であると思ふのであります。しかし奈良朝に於ても優れた大徳が多く出て居ります。當時に行はれた種々なる御祈禱其他の文献によりますと、皇室の爲に忠義を盡した人々も固より澤山ありますから、道鏡の如き者が二人とある筈はないと存じます。それをお抑止することが出來なんだ點に於て、奈良朝の佛教は國體明微の觀念が足らなんだと云はざるを得ぬのであります。

### 五、時代思想と大師報國の赤誠

當時の地方の佛教は、大寺は何千戸の人民を領して居る、何十町の田地を有して居る僧尼が何十何百と住んで居る、堂々たる豪族であります。又中心の奈良の京には何千人の僧侶が社會の上層階級として、新來の勢力に依つて居るのであります。たとへ道鏡の事件は片附いても、佛教の勢力は抜くべからざるものがある。こゝに英邁な桓武天皇は外來思想の佛教に淫せられて、種々な習慣がついて居る奈良に居つては、日本精神の發揮と國體の尊嚴の維持が出來ない

と思召され、かくて遷都の大英斷を下されたのであります。道鏡の死は、寶龜三年四月で、弘法大師御誕生の三年前であり傳教大師御出世の六年後であります。かういふ時代空氣の中にお生れなされた兩大師の中にも、傳教大師は都に近かつたと、又お年が行つて居られたと、それだけ早く朝廷に出仕せらるゝ位置に立たれた、十八才で已に叡山に庵を結ばれて、終に延暦寺を打建てられたのであります。弘法大師は少年時代に、讃岐の御家庭に於て、儒學を専門にお學びなされ忠孝の道を十分に究められたことは明かであるが、故郷から都に召連れられます。阿刀大足公は、即ち伊豫親王の侍講であつて、直接皇室に御關係のおありなされたお方であります。上述の如き御家系に生れられ、家學と阿刀氏との教育を受けられた大師が奈良朝佛教の弊風を、如何に感ぜられたか、大師が十五才にして長岡へお上りなされた時は、都はどんく遷されて居つた最中であります。十八才にして大學に入られやがて佛教を學ばせらるゝ間に、京都へ遷都せらるゝに至つた其の世相の間に立つて、年少氣銳にして敏感な大師は、宗教によつて此國家に御奉公しやうと考へられるとき當時舶來の最も優れた思想である佛教の外に頼るも

がない、しかし朝廷の思召と、亦志ある野人たちの思想の動向は、從來の奈良佛教ではいけない。さうして特に國體と一致すべき教でなければいけない、かかる點に十分着眼遊ばされたことは、實に當然のことだと思ひます。

我々は大師が久米の東塔に於て大日經を感見遊ばされた、宗教的な本道のみは詳しく述べるが、それと相俟つて大師が三十才にして入唐せられる迄、十年間の苦修練行のみならず、時代思想に影響せられて終に日本精神に依る眞言密教の開祖となられたことは知らぬのであります。私は高祖大師の御精神をかく考察することが、我々にも宗教報國の信念を、體得させて戴けることになると思ふのであります。今迄の大師傳の中には、さういふ説があり得ると思ひますが、寡聞にして未だ承つて居りません、私は時代の影響に依る大精神を、大師傳の中に明記することを此處で諸君に御相談申上げるのであります。

大師の眞言密教の開創は、鎮護國家の誓願に依つて、將來せられたものであるから、その獻身的な御信念が又國體に基く思想から湧いて居る。乃ち大伴一家の先祖からの徹底した精神に

依り生れ代り死に代り皇室に御奉公申上げると云ふことであります。従つて大師御一代の御業蹟は、すべて皇家の御爲を計り奉らることであつた、それは一部の性靈集を讀めば、明白であると思ひます。殊に「大僧都空海嬰疾上表辭職奉狀」に書かれて居る「伏して請ふ、陛下、終りて臨むの一言を願りみ賜ふて、三密の法教を棄て給はされ、生々に陛下の法城と爲り、世々に陛下の法將と作らん」と云ふ御言詞は、千萬古を通じて、大師の宗教報國の精神を、表現して居るのみならず、臣子として皇室に對する赤誠を披歴し奉つて、全く餘蕪のなきものであります。

私は三十年前から、此言葉と生命とが、楠公に傳はり、四十七士に及び、更に明治時代に至つて、廣瀬、橋、乃木等の軍人精神になつたものでありますと唱道して來たのであります。今にして想へば、是れ實に大師の御家系に依る、建國以來の祖先から、高祖の血潮の中に、奔流し來た大生命であることを、知ることを得たのであります、是れが即ち我神ながらの日本精神であります。

大師は、恰も今日我將兵が、北、中支那の野に山に、生命を獻げて御奉公申して居ると同じ御精神にて、眞言密教を傳來せられたのである。我々は大師が御信任を受けられた陛下に對し臨終の御一言として、仰せ上げられた「願はくば三密の法教を弃て給はされ」この血と涙の御言葉を、何と受取るべきでありますか、私は從來我宗徒があまりに安易に此重大な御言葉を、使用し過ぎて居らぬかを、懺悔せざるを得ぬのであります。

## 六、密教と日本精神

さてこれから、眞言宗の日本精神的な、意義の所を、二三申上げて見たい。之れも又全くの私見であります。研究が足つて居りませんが、私の見た眞言密教と日本精神との契合點の二三を申上げます。密教と、日本精神との契合點の第一は、即身成佛の思想は人即神と云ふ日本精神に含まれて居る。日本は神代の昔から、人即神、神と人とは一であるとの信念が、今日迄續いて居るのであります。所謂八百萬の神と云ふこの八千萬の民草が、その儘神の子孫であり、

また神である。この思想は極く朴素的な隨神の考へ方であります。佛教の方では深秘幽玄な思想であるが、結局人間から出て、人間がなる神、即ち佛、即身成佛と云ふのでありますから、神ながらの思想と一致するのであります。日本人の考へは元來現世主義人間本位で、人即佛の宗教でなければ、一致せぬのであります。

弘法大師は日本に於ける即身成佛論の、最初の主張者であると共に、體現者であります、即身成佛義を始め、十卷章中の御撰述大日經、理趣經、梵網經等諸種の解題の何れを読みましても、宗教の本義は即身成佛であるといふこと以外には何ものもない、即身成佛しないものは皆顯教である、三大無數劫の長い間掛つて成佛するやうな教は劣惠誘引の淺教である。況んや未來へ行つて成佛するとか、往生するとかいふやうな教は、大師は毫も書いて居られぬ、勿論修行の上に種々の階段はありますが、大師の宗旨は即身成佛一本槍であると思ひます。私は讀んだものが貧弱であります、私の讀んだ書物に、即身成佛を高調せられぬ御提撕は見當らぬやうに思ふのであります。

第二は曼荼羅世界の思想であります、曼荼羅法界といふことに就ては昨日中井學務部長のお話がありました。それで私は別に附け加へませんが、この曼荼羅思想と、それから高天原といふ思想と、どれ程よく似て居るかを諸君に検討して戴きたいのであります。高天原と云ふことは、記紀に出て居りますが、神道家や國學者の間に於て種々な説があるのであります。高天が原は日向の高千穂の峯亦は其附近ではないかとか、或は大和の或土地ではないか、亦は天雲の上に高天原があつて八百萬の神がお在であるといふ思想、更に宗教的な理想として高天原が出来るといふ思想、それから現在の國土、人民をその儘高天原であるといふ思想、かく種々の考へがあるが、結局は八百萬の神が過現未を通じて實在して居られるといふ信仰に歸するのであります。この八百萬の神々が世界に過現未を通じて實在せると言ふ信仰、これは原始的に考へれば迷信のやうであります、これを更に聖化し理智化すると、曼荼羅思想と類似して來はせぬか、大日如來を根本として十界具足したる諸佛諸菩薩、その他の生物が實在して居る、そのまゝが、永遠性のある密嚴淨土であるといふ思想、此輪圓具足せる曼荼羅法界と、過現未の世界

に充満する、八百萬の神が、常な活動して居らるゝ、高天が原の思想とは、歴史的、慣習的、名目的約束を超すれば、優に一致し得る所が存するではないか、第三には密教で言ふ法爾の世界であります。他の佛教では多く正像末の三世を立てゝ、現在の世界は已に正法像法の世を去りて、未法といふ下つた世界だといひ、現代の煩惱罪障に纏はれて居る世界であると云ひます。が、それに對して「人法法爾たり、興廢何れの時ぞ、機根絶々たり、正像何ぞ別たん」といふのが大師の御示しであります。即ち人法法爾たりで決して正、像、未などの區別はない、真言宗徒は密嚴國土に常在して、永遠不滅の法悅三昧に入つて居る現在の外に、淨土も極樂も求めぬと云ふ過、現、未の三世を通貫した、現世主義に徹底して居るのが真言宗であります。

これに對して神道に「中今」といふ言詞がある、此中今と云ふ文字は、文武天皇御即位の宣命に出て居りますが、この中今といふ思想の中といふのは中道、中庸といふやうに考へても宜しい、最も勝れて居ると云ふことです、それに今と云ひますから即ち今が一番勝れて居る時だといふことで、今日以外の時を認めぬといふことであります。これが惟神の思想であり、亦日居るではあります。

本精神であります。日本人は所謂苦しいとか、辛いとか、泣き言を云はぬ、現時の非常時局に當つても決して意氣阻喪はしない、いつでも裸になつて、元氣を出して活動する、だから今が一番宜い、困つて居つても困らぬと考へて後と前きなんかは考へぬ現世主義に徹底して居る、これが日本精神であります。これに對して大師の人法法爾たりと曰はれる思想はよく一致して居るではあります。

尙、真言密教の教義と日本精神とに付ては申し上ぐべき問題がありますが、省略して置きます。かくの如く大師のお傳へせられた密教の中心思想と、日本思想とがよく合ふて居る大師の密教は決して印度支那で出來たそのまゝではなく、大師の獨創的に日本的に蟬脱せられた點があるのであります。

## 七、神道並に御皇室と真言宗

それから神佛一如の思想、これは大師がさういふお考を持つて居られたと云ふて宜しか宜し

くないか、私は大師の御著述の上に、兩部神道、亦は本地垂迹といふ説はないやうに存じます。併しながら大師が我國神を尊ばれたといふことは、高野山に於ける兩大明神に對するお禊け方について考へても、或は東寺の氏神に伏見の稻荷神を、御祭りせられたことに見ましても、それが後來諸國の真言宗の寺院に鎮守の神を祀るに至つた、大師がその本を作られたと申すべきであります。又大師が日々どうして國神をお祈りなされて居つたかといふことに付て、當時の修法の次第をこの間見ましたが、大師全集に出て居りまする胎藏界の作法次第等に、今日我々が用ひて居ると同じく表白神分といふ名目が出て居ります。だから大師が修法をなさる折に神分をお唱へなされて、國神にお祈願遊ばされたことは明かであると思ふのであります。

古來唱へらるゝ本地垂迹といふ説は、先づ佛本神末の思想だと申して宜しいかと思ひます。さういふ思想は神佛一如といふ考へより前の考へ方だと思ひますが、行基菩薩が主唱されたなどゝ傳へられて居ります。次に兩部神道の説、これは真言宗の金剛界胎藏界の、兩部といふ思想から出て来る必然性があるのであります。だから後の真言の阿闍梨がそれを唱へ出されたも

のと、想像するのであります。兩部神道に就ては伊勢の内宮外宮を兩部といふとか、神佛を兩部といふとかいふ説がありますが、兩部といふ以上は恐らく神佛を一如にした、真言の曼荼羅界會と國神の高天原の世界とを一如に見た考へ方が、正統の考へ方だらうと思ひますが、さういふ考へ方は、國體に相應する宗教を打立てようといふ大師の御精神を繼いだ先徳が、それを唱導するに至つたと認められるのであります。高野山では、嵯峨天皇と大師と、御即位の大事と、灌頂の大事とを、示し合はされたのが、兩部神道の起原だと傳へられて居るのであります。

それから御皇室と真言宗との深い御因縁、御關係の歴史は私が申上げるまでもない、平安、鎌倉、足利六百年間のことを別にして、徳川三百年間のみに就ても、真言、天台の兩宗で御皇室の御一部分をお賄ひ申上げた、金枝玉葉の御方々をお引受け申上げて、さうして我々宗徒が特別の御奉公を申上げたことになつて居ると思ひます。經濟的にのみ考へても、御皇室と真言宗とは畏れ多いが、前述の如き深い關係があつたのです。

尙ほ御皇室と眞言宗とは、歴代奉修し來たつた御修法に依つても深厚であり特に、後宇多法皇の御遺詔、その他の尊貴な文献が澤山あります。さればこそ若し國體明徴といふが如き説が出て、國家と佛教とを離れしめやうとする場合には、我宗徒は必ず大師の御精神を想ひ起して、神道に對する兩部説を立てる、これ大師の思想を嗣ぐ宗徒が自然赴く所だと思ひます。この意味に於て徳川末期に於て、廢佛毀釋の大難に逢はんとする時、慈雲尊者の「雲傳神道」が起つたといふことは、これ亦尊者の尊皇愛國の御精神の然らしむる所で、思想上當然の歸結だと思はれます。

兩部神道的思想を如何に扱ふたらよろしいか詳しい研究は別にお願ひ申したいが、この國體明徴の問題に對しては、我々は献身的に努力して居りますが、どういふ譯でありますか、神道の一部、政府官吏の一部等に理解がないようであります。此無理解の爲に我々が大日如來と伊勢大神とを思想的に融合し、信仰的に一致せしめ奉るやうなことがあれば、稍もすれば不敬問題などを惹き起すのであります。それから後宇多法皇の御遺詔を読み上げたりすると、それ

を以て眞言宗を攻撃し、皇室の御尊嚴を損するといふやうに考へる者があるのです。

私は本年學校で、國體論を講義して居りますために「日本精神文化大系」を一應讀みたいと思ひ、その中に御詔勅集といふのがありますから、調べて見ますと、私が讀みたいと思つた後宇多法皇の御遺詔がないのであります。御遺詔の外の所はありますて肝心な第三條がない、それが除けてあるのであります。此の書は、徳富蘆峰、佐々木信綱其他今日の學界の有名な人々が編纂し、監修したといふことになつてをりますが、何故か眞言宗と御皇室に關する後宇多法皇の御遺詔だけが除けてあるのであります。私は諸君にお考へを戴きたい日本精神に關する多くの書物を集めてある十卷の大書の中に、我眞言宗の御皇室に對する一番大切な文献が削除されてをると云ふことに依つて見ても、現代の學者、官吏、神官等の人々の中に國家の文化に就て全面的な理解をすることの出來ぬ者が、相當多いことを知らねばならぬ。

昨日、お話を承りました。大日如來と伊勢の御本宮とが相似てござるといふことを書いた爲に、伊豫の某寺の雄誌が發行停止になつたといふこと、中井部長からは外の方面には隨分さう

ゆう文章も無事に通つて居ると承りますが、今日地方の縣廳の官吏の人達には、理解のない人が相當あるかと存じます、諸君はこれを豫想して置いて戴きたいと思ふのであります。現時國民の思想が過敏になつて居る際に、こちらに如何に理があることでも、なるべく問題を起さぬやうにしたいのであります。國民の思想が調和されて穩かになつた時分に、淳々として説けば現在あるものが、失はれることはないと存じます。今日の如く國民思想が末梢的に過敏になつて居る時には、つとめて摩擦を避けるのが、世を憂ふる者の態度だと存するのであります。

### 八、大師中心の布教と教義

これから愈々私が、今回特に申上げたいと思つて出席した眞言宗の布教方針について卑見を述べさせて頂きます。先づ結論から先に申上げて置きます。私が大師中心の布教について、多年説いて來たことは諸君が御承知のことと存じます。従つて今後もやはり大師中心の布教方針に依つて相共に努めて行きたいと思ふのであります。大師中心の布教については私が申上げな

いでも、布教界の元老達は多年實行して來られて居る。諸君もそんなことは疾に決つて居ることで、大師教會本部の、高野山布教師として已にやつて居るではないかと、かう仰有ることを私は覺悟して居りますが、私は今日更にこれを再認識して頂きたいといふ必要を痛感して居るのであります。

それからこれはまことに失禮と存じますが、布教といふことは唯他の教化といふことでない、同時に自行でなければならぬ。さういふ意味で大師中心の布教をする者は、如何なる行を修したら宜しいか、今日は學校の教育に於ても、理智的な教育は寧ろ排斥されて、意思的な教育をしなければならぬといふことが唱道されて居る際であります。殊に宗教は理智的なものではない。行的なものだと存じます。この見地から現在迄の我々の布教や日常の行ひに、果して行的な方面がどれ程あつたか、私は大師本位の布教といふことをお話すると同時に此點に就てお願ひしたいことがあります。

私は大師本位の布教について多くの責任があります。十數年前に高野山に於ける宗祖千百年

の御遠忌事業の計畫を樹てた時に恰も私は大師教會本部の幹事として現在の本部長の仕事を執つて居りました。その時に今後御遠忌迄の布教方針は報恩傳道といふ事で、大師中心の布教を全宗徹底してやらうと決めたのであります。その際に布教界の元老である先輩の方からお叱りを受けたことがある。大師本位の報恩傳道といふことに決ると、眞言宗の宗義の上から考へても第二義的に墮して居るではないか、又只大師信者を目當にするといふ布教ならば、布教の實質低下した方針になつては居らぬかといふ、御意見を承はつたのであります。

併しこれは私の考とは全く違ふのであります。その方は宗義に暗いと言ふよりは、少くとも大師に對する考へが、私とは相違したのであります。大師本位の布教と申しましても、大師と大日との關係を如何に考へるかといふことが中心問題であります。

大日如來に就ては中井部長が詳しく述べお話が出来て居りますから私は之れに加へる必要がないと思ひます。昨日も中井部長の御話のあとで、私は僧正に申して置いた。「私はあなたのお話を背後に負うて、その前立ちになつてお話をすると、貴師の大日を中心とする御意見は全部

頂戴致しますので御承認を願ひます」と申上げた、「それはどうもするい仕方ぢやな」といふことでありましたが、兎も角眞言宗は法身大日如來を宗體の根本とし、普門萬德の本尊として居るといふことは大師の御提撕、已に明かであつて、異義を差挿むことは出來ませぬ。併しながら大日とは何ぞやといひますと、所謂曼荼羅界會の諸尊は即ち大日の分身であると共に、直に大日である。二而不二の深義に徹底すれば、皆仏大日であるといふことはきまつたことであります。之れが理解の上から亦信仰の邊から、お互の肚によく這入つて居らぬかは別であります、一應は皆承知して居る所であります。

亦ある學者たちは、布教本部の大師教會が、大師爲本の布教方針を決めるといふと、大師以外の總ての別尊を封じ込んで、大師だけを説くといふのは、また宗義に合はぬと言はれるかも知れぬが、そこは今日我宗の布教を擴大強化せねばならぬ時に、如何にすれば一宗の實情に相應し、時代の要求に合一して我宗運の發展を期し得るかと云ふことを、充分熟考せねばならぬと思ふのであります。今日の時代に於て我眞言宗徒、殊に大師教會本部から派遣される布教師

の教説が二になり三になり、方針が一定して居らねば、指導教化の効果が甚だ微弱になりはせぬか、今日迄にも此要求は度々ありましたが、今日以後は特に布教方針を徹底して頂きたいのであります。

この非常時局に處して教策の上から資財の上から北支或は中支に對する布教方針を指導したり、實行したりする事は宗内自らその人があると思ひまするが、精神的に布教の方針を確立し、信仰上の安心を徹底して踏み出すといふ事は、それは此處に集られる布教師各位の責任であります、それつと云ふて風呂から飛び出して真ツ裸で飛んで行くのも結構であります、いつも裸で走つて行く事は出來ません、大事業に着手せんとする者は、先づ着物を着て飯を食ふだけの餘裕が必要だと思ふのであります。それで我布教師諸君の内部の必要條件が完備して居るかどうかといふことをお尋ねするのであります。皆さんが北支へ行かれても、今日召集されて戰線へ立つても、國內で布教をしても、お互に布教方針の徹底したはつきり決つた肚、それが出來て居るかどうか、私はこれを根本から検討して立たなくては、不可と考へるのであります。

ます。

さらば真言宗の布教を統一強化しようといつて、全く大師本位の一つにしてしまつたらよいが、今此信貴山へ来て真言宗の布教を大日爲本の布教と決めて、それ以外は一切いかぬ、毘沙門さんは封鎖せよ、信貴山も大日如來を拜まねばいかぬと言つたら、信貴山が困るばかりではない、延いて本山も宗務所も弱るのであります私の寺でもさうであります、先山の本尊は千手觀音様であります。一千年来千手觀音様で來たのでありますから、外の御方では流行りません、如何に工夫しても駄目であります。

我宗の一部分の寺院は、皆さういふ風になつて居ります。どれ程迄さうなつて居るか、恐らく四分の一若しくは五分の一位さうなつて居りますか、別に統計を調べたことがありませんが、兎に角真言宗の布教方針といひましても、徹底して大師に決めてしまへとも、大日如來に決めてしまへとも、いへぬ寺院があるのであります、新地建立の所ならば大體は宗務所の方針で弘法大師を本尊とするといふことが出来ると思ひます。本尊はどつちになつてもいいといふ

やうな寺院が、四分の三もあるのではないかと思ひます、その程度の所は大師爲本の布教で別に齟齬を生ずるやうなことはない、この時局に對する布教方針の強化といふことについては、皆様に同感願へるだらうと思ひます。

### 九、大師本尊觀と日本佛教

そこで私がなぜ大師即法身、大日といふ考へ方をするか、かういふことです、若し左様に問ふ人があつたならば、私はその方に大師は成佛して居られるか未だ成佛して居られぬか、どちらかとお尋ね致したい、若し成佛して居られぬならば問題はありません、苟も成佛して居られるならば半端な成佛をして居られる筈はない、萬德輪圓の根本法身に徹底して居られるに違ひない。たとへ所謂小國沙門の空海上人でも亦三地の薩埵でも、初地即極の上から徹底した大日如來に相違ないと思ひます、我大師は、久米の塔柱から、大日經を感じて以來、南都其他の所有大徳に就て智見を磨かるゝと共に、大峯、高野、其他畿内、内海、中國等の嶮山、孤峯、

と海岸流渚に、苦修練行せらるゝこと十春秋、終に萬里の波濤を凌いで入唐し、青龍寺に惠果阿闍梨を訪はるゝや、兩部の大法を傳へ、秘密灌頂の壇に入り、投花得佛せられ、遍照金剛尊として、法身大日の寶位に登臨し、無上の覺を現成せられたのであります。さてかくの如く大師が成佛して居らるゝとすると、大師以外に如何なる佛陀を求めねばならぬか。

住持の三寶ならば佛菩薩の木像や繪畫などで教へ示される佛陀か、或は理想願求の上に影現する報身的の佛陀か、亦は密教の宗義の上から諦觀する、盡天地全法界が、直に法身大毘盧遮那佛と開見するか、これ等の佛陀を信奉するのと、大師が私どもと同じ肉身ながらの法身を以て教へらるゝのとどつちが有難いか、亦どちらが宗教的意義が深いか、私は人間であります。それだから私と同じ身體を持ちながら、法身の萬徳を備へて居らるゝ方がありとすれば、人間外の世界の方よりはこちらの方が遙かに有難い、人情味があつて嬉しいのでありますから、私は何處までも我大師に随つて行きたいと思ひます。

私は宗教は哲學や倫理學とは違ふと思ふ、日本佛教の歴史を考へましても、奈良朝六宗の佛

教が今日宗教としての活力を持つて居らぬといふのは、一には日本精神に副はなんだからである。二には人格的本尊を持たず、行的修業を缺き、理智的、學問的宗教であつたためであります。日本精神に副はない宗教は過去もその通りであります。將來とても日本の國で花が咲いたり實を結ぶといふことは断じてない、眞言宗は天台宗と共に千百年昔からの老齢者であります、今まで鎌倉時代に開かれた佛教に遜色なしに進んで來た、更に命脉を新たにして進んで行かうとして居る。それは實にこの國體精神を體して居るからであると私は信するのであります。

他而日本佛教發達の跡を考へますと、その理智的なるものより情的、意志的なものに展開し、本尊觀に於ても、抽象的なものより具體的なものに變更し、終には超越的なものから、人間的なものに轉化し來つたことを見るのであります。奈良朝佛教は、法相三論乃至華嚴宗にしても、皆理智的學問的であつた、鎌倉時代の禪、淨土、眞宗、日蓮宗は、一は阿彌陀の絕對慈悲に歸命する情的信仰を強調し、一は絕對座斷の禪法に依つて意志を強制統一する方法を教へます。

た、日蓮宗は聲字實相の眞言の本義と、念佛口唱の淨土の信仰とを調和せる如き、唱題成佛を提唱し、獨特の實修法を案出した、その本尊觀にしても、淨土宗は絕對法身より人格的報身如來に下つて、情的寫象を充足せしめて居る。禪宗は人格的釋尊を中心として、三身の差を超脱せる如き態度と解することが出来る。日蓮宗は釋尊に即して久遠實成の毘盧遮那を談り、更らに上行菩薩、日蓮聖人をすら、本尊として一體化して題目曼荼羅の上に統一具現して居るのである。

我が眞言宗の本尊觀は、法身大日如來を中心とし、曼荼羅界會の菩薩、諸天までに及んで、普門一門の義が立つて居るのであるが、宗義上法身說法、不說法の問題を、理智的に解決しつゝある間に新義派では加持身說法の義を提唱するに至つた。そして大日法身普門萬德尊を本尊とする眞義は、最勝無比であるにかゝらず、大衆的信仰の動向は、不動、阿彌陀、藥師觀音、地藏、毘沙門、聖天、辨天、更に大いに高祖大師の一門としての佛、菩薩天部の各尊に推移して、根本の大日如來の信仰的勢力は甚だ微々たるものである。この事實は何を語るもの

であるか、宗教の信仰は、理智的よりは情意的なものを、抽象的哲學的よりは、實際的、心理的、具體的なものを、要求することを語つて居るので、之は宗教學の初步の教ゆる所であると共に、又我佛教史の如實に示す所であります。

## 十、日支印思想の相違と大師觀

これは小野玄妙博士等から聽いたのですが、佛法僧の三寶の中で印度に於ては佛寶が一番尊ばれて居る。それは釋尊が直接お生れなされた所であるから、釋尊の芳蹟を偲んで佛寶を盛んに尊ぶ、支那に於ては法寶を尊ぶ、三寶の中で支那人は法を最も尊ぶ、佛陀は祀らなくとも、お經は非常に大切にする支那の居士などは經卷を最も、大切にして丁度佛を祀るが如く高い床に祀つて始終拜んで居る。法寶はしかし大切にするが僧寶は大切にしない、僧侶と云ふものは、法を行ふ爲にあるので、普通の人間としては價值はない、又印度でも、支那でも、元來形式を尊ぶ尚古主義、保守主義な國民でありますから、人の自然性と云ふものを壓迫して、只形

式的に法を行ひ、佛を拜んで居ればよいと云ふことで、従つて實際生活の人間社會から遊離することになり、僧は佛を拜む者、戒を守る者、佛と法とを傳へる道具が、僧寶であると云ふ様になつて居るのであります。これが印度の佛教が二千年間一向發達せず、支那の佛教が今日死灰化して、社會的に何等の活力なく、僧侶は乞食以下の廢人となつて居る次第であつて、印度と支那とは、佛寶と法寶とのみあつて、活きた僧寶がないと云ふことになつて居る次第であります。

所が日本人は佛と法とよりは寧ろ人を尊ぶ風習があります。そこが日本精神の現世主義、人間主義、進歩主義、活動主義、積極主義な根源であります。日本人は佛と法より寧ろ人を尊ぶ、その證據は、眞宗の親鸞聖人は愚癡親鸞と仰せられ、自分は門徒衆の同行であつて、決して師匠ではない、僧行はお前方の連れである、そしてお前等と一緒に如來の御救ひを受くるのである、と仰せられた。聖人は自分は詰らぬ者で人に供養して貢ふ程の功德のない半僧半俗の者だと仰しやつて居られるのに、現今本願寺の祖師堂は堂々として如來堂を壓して居る、亦聖人

の御血族が何十代も續いて、王侯の如き法權を左右し、天に聳ゆる殿堂樓閣の中で美衣美食して天下に誇つて居ても、誰も怪しむ者がない、そして千萬の門徒に手を合はして拜まれる、而も果して法主連枝方が法の上に於て、どれだけの御徳があるのか、誰も分らぬのである。それ程三寶の中の僧を尊ぶと云ふよりは、寧ろ人間本位の人を尊ぶ、或は血を尊ぶ、肉を尊ぶと云ふのが日本人の本然性なのであります。

こゝで申し上げるのは畏れ多いことですが、天照大神をはじめ奉り、歴代の御皇室は人の最上でお在します、人にして即神であり、亦直に佛であるとも考へられる、天下にこれ以上尊貴なものはない、これが即ち人本位の最高思想と云ふべきであります。御皇室を例に申し上げたのは、まことに畏れ多いことですが、これを以て日本佛教の、印度と支那とに對して、甚だしき差異を呈して居つても、猶且つ大乘佛教として、存立し得る根據が知れるのであります。此人本位の日本思想が、あり難いことには今日の佛教寺院生活を豊富にして居るのであります。お互に法の上ではまことに耻かしい存在であるにかゝわらず、僧寶として檀信徒の上に

立つて安樂に暮せることが出来る譯であります。

そこで話は元へ戻つて、弘法大師は日本密教を御開創遊ばされた第一人でおはします。第一人でおはしますから日本人として考へると佛よりも法よりも力があるのです。生身の大日如來であります、これ以外に大日を見る、これ以外に法を見る、これ以上に尊いものを見ることは我々の信仰が許さぬのであります。大師あつて始めて日本密教の一切は展開して居る、此中に一切の佛教は包藏されて居る、こう信じて大師を本尊として行きたいのであります。

私は今日の大學生で、この布教方針の基礎となる教義を整へて頂きたいのであります。大師の種々なる御著述は、當時の日本佛教を改變し、佛教徒の信仰生活の最大指針となつたものと存じますと共に、現在の宗學者は、古傳古說の中から超脱して、時代民衆の思潮の動向と、宗門の教策に應じて、新學風を興起すべき必要に迫られては居らぬか。私は大日如來としての高祖大師を如何に拜し奉るべきかと云ふことを、宗學者に充分窺いたいのであります。我教學では兎角に佛と、人とを離して説く習風を感するのであります、大師は秘藏寶鑑の中に、「法は

人に資つて弘まり、人は法を待て昇る人法一軀にして別異なることを得ず」と曰はれて居る、私はこの人法のみならず、三寶一軀の大師を、日本精神に依る人本位の立場から、本尊として禮拜することが、日本の將來を指導し得る、強力な宗教と信するのであります。

人間であると共に若しくは人間を表てにして法身である、大師を本尊として立つ、これが私の信仰でありますし、さうして今日の眞言宗は大師のこの尊い御靈格を外にして、どれだけの勢力があるでせうか。私は高野山に居つて毎々感することであるが、高野に參詣する一般庶衆の殆んど總てが、奥之院の御廟を目標に參つて居ることであります。巍々たる大塔、宏壯なる金堂には、五智の如來と藥師如來とが奉安してあるが、之を禮拜する信仰氣分が、奥の院の御寶前との間には相當の距離があると思ひます。是れは必ずしも信者の上ののみではない、我宗徒の中に於ても、亦平生教學に從事する宗學者の中に於ても、信仰上の冷熱と云ふか濃淡と云ふか、氣分の差があるのであります。之を推して全國の我寺院教會の信者の氣分、従つてそれから出づる財政的支拂の力、今日の眞言宗の勢力の大半が、弘法大師の御靈格に依つて居ること

## 十一、大師の芳躅は果上の靈用

とは、實に明白なことで、大師中心の布教方針は、私共の間に充分認識の出來ぬ以前に、全國民は早く已に受け取つて居るのであります。我國の學者たちは、印度人は佛として拜むことが出來るのに、何故に日本人を佛陀と觀することが出來ぬのであらうか。

魏つても一つ申し上げたいことは、大師の「いろは」を作られ「五十音」を作られ、亦綜藝種智院を樹てられた等の、文化事業に御盡瘁下された事績が甚だ澤山あります。それを我々は、大師は普通の人間としてなされたと見ては勿體ないと思ひます。大師が大日法身の覺位に上られた、果上の活動としてなされたものとして見ねば密教精神に合はぬのであり、今日我々がする種々の仕事も、宗教的意義を持たず神聖を失ふのであります。大師が「いろは」を作り「アイウエオ」をお作りなされ亦教育家として綜藝種智院をお開きなされ、其他池を造り、寺を建てらるゝ等の如何なる事業をなされた時も、一は皆御皇室に御奉公を申上げるといふことを

根本にお考へなされて居る、しかも同時にそれは、嚴淨國土の御誓願の達成で、悉く佛作佛業であるとの信念に依る衆生濟度の聖業であつたのであります。

更に深く「いろは」や五十音をお作りなされた日本精神的意義を、考察致しますと、大師は不幸と申上げてよいか、幸福と申上げてよいか、幼にして漢學を専一に御勉強なされて、漢學者として當時の日本には勿論二人とない優れた方であらせられる、文章詩、その他文學の方面の特種な御製作に見るも鎌倉、足利を通じて佛教徒の方にはあります。徳川時代の儒者も澤山ありますするが、それ等の人に就て見ても、大師の偉大さがわかるのであります。それ程大漢學者であり、大文章家である大師は當時の文化をこれは支那のもので純粹な日本精神的な文化でないと心付かれたのであります。それでは非とも日本の文字による文化を作らねばならぬといふお考から、梵學の知識、漢學をくづす知識などから、萬葉假名を訂正して「いろは」片假名」をお作りなされたのであります。果然大師の後に次いで興つた平安朝文字は日本の文字によつて、日本精神獨特の、支那の影響を離れた、或はしかくつとめた文學が興つたのであります。

す。「いろは」を読みましたら般若心經秘鍵を一巻讀んだのと同じ理趣が書いてあります、大師でなくてはかくも徹底した歌は出來ませぬ。大師の宗教報國の誓願と、果上の威神力とが相俟つて始めて日本的、獨創的文化が興隆することになつたのであります。

大師の偉大さを今更お話申すといふことはどうも相濟まぬことでありましたが、今後は大師を大日如來と見奉る根本の精神を決めた布教、やがて又我々は果上に立つて居ると心をきめた布教をして戴きたいのであります。今迄の布教師は方便引進といふか、因位の大師といひますか、或は捨身誓願、或は四國開きの大師、兎に角因位の大師の有難さに重きを置いて説くことの方が多い、從つて大師即大日といふ肚になつて、布教をする方針が立つて居らぬやうに思ひます。

これも先輩に對して相演まぬことであります、安心教示章のやうな未來主義な教へ方、或は安心義章といふやうな理智的な乾燥無味な教へ方、さういふことでは日本精神に添はず、亦大衆的に力がある盛になり宗教でないと私は思ひます。人格的なその強い温かな魅力を始終我

々の信念の上に湧かす、そうして常に信仰と行為とを一つに溶かして行く、かういふことにならねば本宗の将来は社會的活力を失ふものと存するのであります。現在の新興宗教の勢力から考へて見まして、この人本位の點が最も活力があることに就て、我々は充分考へねばならぬ。しかし如何に人本位と云ふても充分法を尊び更らに、修行といふことを忘れぬ宗教でなくてはいかないといふことを考へねばなりません。

## 十一、布教家の修養法

修行に付て最後にいさゝかお話申したい、私も修行の足らぬ者で、まことにをこがましく恐縮ですが、平生大師が「秘藏寶鑑」に示されて居る、「經を読み佛を禮して國家の恩を報じ、觀念座禪して四恩の徳に答ふ」との御言葉を、まことに有難く存じて居るので、この非常の時局に際し御奉公の一端と思ひまして、特に毎朝一座の行法をして、玉体の御安穩と、皇軍の武運長久を祈つて居ります。それからこれは前田本部長に、皆様の御賛成を得て、この次第、即ち

「大師法」は水原僧正の編輯せられたものであります、これを、御一同に教會本部から、差上げるやうにして貰ひたいと、申上げて居るのであります。

前本部長の名越僧正に承りますと、教會教師には全部大師法を授けて、それを朝夕行へと教へて居るといふことであります。そうすると教會教師の人々は毎日大師法を修して居るのにお互に高級の者は大師法を毎日修して居るかどうか、これを一つお考へを願ひたいのであります。中にはその寺々の本尊の法を修しなさる方もあります、又それ／＼縁に應じて、修行をしてござると思ひますけれども、私は大師本位の布教をする以上は、毎日布教師は、必ず一座の大師法を修せねばならぬと思ふのであります。御承知の如く大師法は他の一尊法、大日法、千手法、不動法等の何れとも、大した相違はありません、さうして大師法に徹底すれば大日如來と一體になることもはつきりして居る。最も大師法は、何人が何時始めて作られたか、これは其道の方にお調べ願ひたい、高野山の圖書館には永享十年に書かれたものと、應仁三年のものとが古いものとしてあります。其内容も事相の流派に依つて多少の相違があると思ひます

が、大師即大日たる大師と、行者とが感應同交する一軀觀に入ることは、何れも一つであると存じます。前にも述べましたやうに、眞言宗は即身成佛の法であります、この法を説く布教師は、先づ成佛して居らねばならぬ、其の成佛の方法は勿論外にあります、が、一番これが手取り早く大師即大日如來に成る法であると存じます。

此度御出席の布教師諸君が明日から皆大師になつて下さつたらどういふことになりますか、已に諸君は皆大師であります、眞言宗を開いたのは皇室の爲、國體明徳の爲、而して今日の日本を救濟する爲であります、かくて諸君は自發的に大師と同じく果上の活動を日々なさることになる、即ちこの大師法が諸君を指導して下さるのであります。大學の學生などにも、よく見受くることであります、我即大日といふ議論を始終致します。眞言宗は即身成佛の法門だと力んで居ります。しかしどうしたら成佛出来るかといふことは考へぬのであります。三密双修すれば速疾に顯ると申します、しかし三密どころか一密も行ひませぬ、即身成佛を誰がするのか、お互が成佛をしなければ、他人に勧めても何の事か分らぬ、私は宮野前官から教はつたの

ですが、管長様からでも門主様からでも布教師のお方が、機縁に應じて大師法をお受けなさるやうに願ひたい、勝願を發す者には越法罪は消ゆといふこともありますから、諸君の如き方は直ぐ修せられてよろしいとも思ひます。

尙布教傳道に出られました場合に、到る先で何處でとも必ずこの大師法を毎日一座朝早く起きて勤修する、そしてその一日は我即大師かういふ考へで居る、我即大師の覺悟で布教すればあまり粗末なことは説けず亦行へぬと思ひます。我々は我即大師の覺悟して努めて止まねば、實際成佛出来るではないですか、私は御本尊が大師になれば、大分御心安う感じますから、我々の如きものでも成佛が出来るのではないかと、今更密教の最勝と值遇の因縁を喜ぶのであります、そうして信者にもそれを勧めて成佛の道に入らせる、終には信者の方でも篤信の人にはこれを教へるやうに仕たいと思ひます。

### 十三、普門の布教一門の布教

それからこれは序の御話ですか、中井僧正は多年研鑽實修の上で大日爲本宗幹明徹の議を高調せられ、特に阿字觀の實修をお勧め下さつて居る、私は僧正の憂宗の御誠意に滿腔の尊敬を擧げ、阿字觀は非常に結構だと思います、申す迄もなく我宗の多くの先徳なり篤志の居士方は古來阿字觀を修して、皆大功德の成就して居られるのであります。お互に有志の方は是非お教を受けて徹底して下さるやうにお勧め致します。そして近時稀有の、中井僧正の聖業が全國に普及することを切望致します。

しかし私の此新らしい布教方針の立場から申すと、教義上普門であるべき大日中心の中井僧正の御説を、普門そのまゝ一門の布教と取り扱ふのであります。阿字觀の御提唱も、普門的布教でなくて、一部のインテリ層を目指した一門の修養法と、取り扱はねばならぬのであります。妙なことを申すと思はれましやうが、今眞言一宗の御本尊を、大師と想定すれば大師こそ普門萬德の尊であります。そして其裏面に或は内包せられて居る大日尊は却つて一門の尊となられるのであります。斯の如く其立場に依つて重々の意義を生ずることを充分認識して、大師

教會本部が、大師中心、人間本位の普門の布教方針を樹立せられることを、私は希望するのであります。

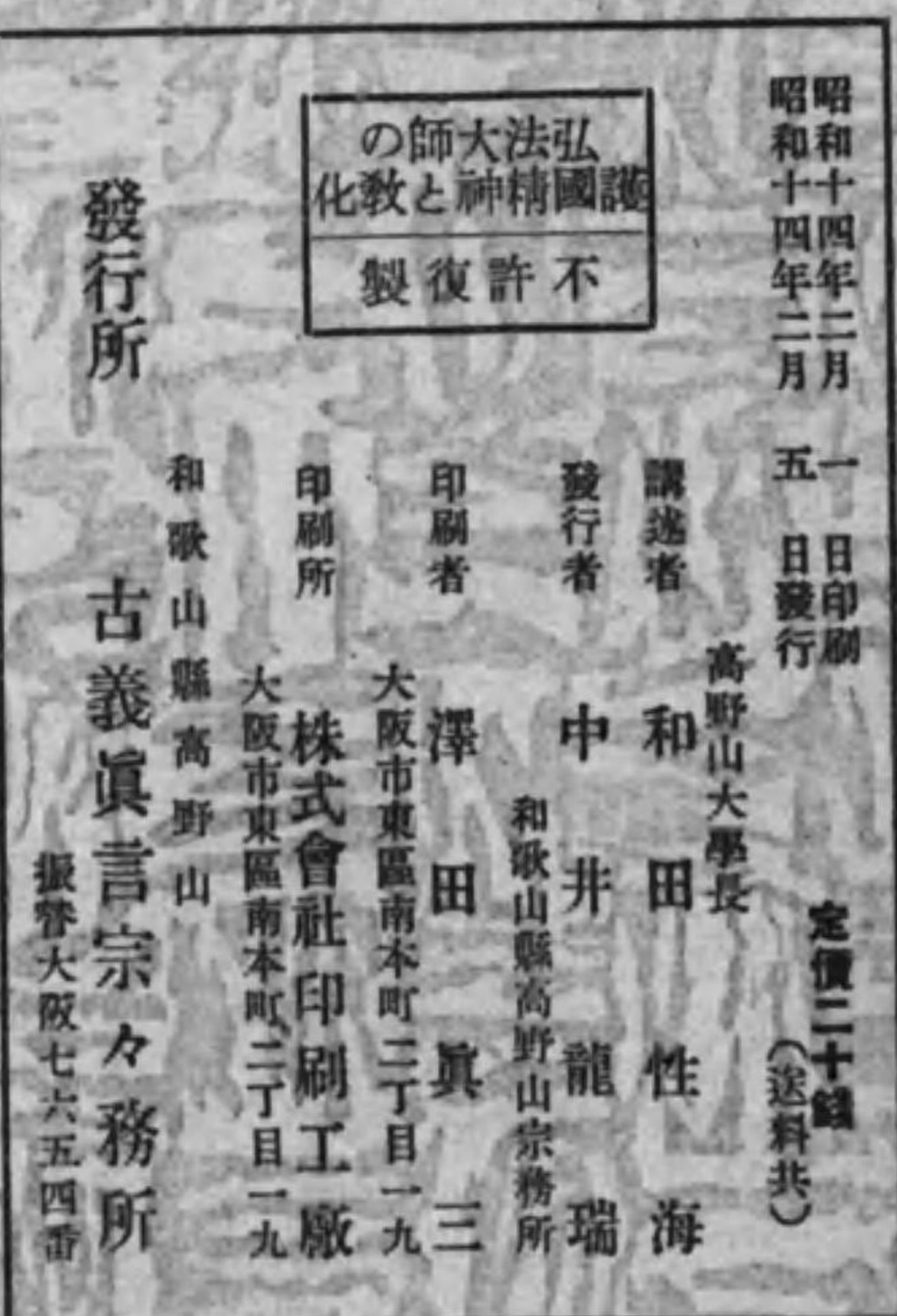
最後に私は布教師諸君に大師法を修して布教と共に事相を大切にすることを考へて頂きました。事相は信仰の根を培ふものでありますから、布教道に精進する者は事相を大切にする必要があります。現在迄は學者と布教師と事相家とが別々になつて居らなかつたか、私はそれが眞言宗の衰へて居る、活きて居らぬ、證據であると思ひます。だから布教師が先づ事相に徹底して、毎日修法をしつゝ同時に教化して行く、かういふことになれば今後宗運は必ず盛んになります。「大師がこの法を棄て給はざれ」と陛下にお願ひなされた御精神、それに背いては實に相濟まぬと思ひまして、以上繰言を申上げました、勿論私の考へは淺才の致す所、大師の思召とは相違して居るかも知れませぬ、併し以上申上げた一切の意味は皆大師の教の中に含んで居り、大師のお精神の萬分の一は私も伺ひ奉つて居ると信ずるの餘り諸君に、證明を願ふつもりで申上げたのであります、願くばお互が大師に成るといふ精神の下で非常時局に對處致しませ

う。

五〇

又私は一應かようなことを考へて居ります、我々が現在の戦争を聖業であると云ふ證明をするためには自分自身が徹底して聖なるもので、そしてその聖なる行ひを以てこの戦争に参加する、或は銃後の後援事業に參加する、かくて我々個人を通じてでもこの戦争は聖なるものになる、此の觀念も必要であると思ふのであります。勿論今回の戦争の公明正大なる意義は、已に中井僧正から充分御話がありましたから私が、蛇足を加ふる必要はありませんね。

長い間御静聽を煩しまして、洵に有難うございました。



終

